

# 人は死に際に何を見るのか

～臨終の言葉で分かった死の過程と死後の世界～

リサ・スマート レイモンド・ムーディ 共著 徳間書房

リサ・スマート～言語学者・教育者・詩人

レイモンド・ムーディ～「かいまみた死後の世界」著者・医学博士・精神科医

( **はしがき** ) 本書は愛する人々の謎めいた最後の言葉に驚嘆した数多くの人々に安らぎと悟りを与える筈です、又本書の分析は今後数多くの博士論文や臨床研究の出発点となるでしょう。

( **プロローグ** ) 最後の会話が伝えること“人生最後の言葉”に注意深く耳を傾けていると死に対する考え方だけでなく生に対する考え方も変わってきます、本書は1500件を超える最後の言葉を収集(亡くなる数時間から数週間前まで)集めた言葉やエピソードを言語学的特徴やテーマごとに体系化したところ、いくつかのパターンがあり、それはインタビューした医療関係者や専門家たちの意見とも一致しています。私の父は無神論者かつ合理主義者だったが、亡くなる数週間前に「十分だ…十分・天使たちが十分というのだよ、あと3日しかない」と自分の死期を正確に予想した。

1975年に出版された「かいまみた死後の世界」は数百万部売り上げて、著者のムーディは数えきれないほどの講演を行ってきた、彼の話聞き私は彼の探求精神に強く心を動かされ「この人と一緒に研究」することとした。

## 第1章 最後の言葉の神聖なる道をたどる

～著名人がいまわの際に残した気の利いた言葉～

スティーブ・ジョブズ(アップル共同創業者)は「オー!ウォ!オー!ウォ!オー!ウォ!」と驚きに満ちた感嘆の声を上げて旅立った。

トーマス・エジソンは死に際に昏睡状態から覚醒すると目を見開き上に向き「あちらはなんて美しいんだ!」と云った、と

著名な評論家であるロジャー・イームートの妻は2013年にエスクワイア誌上で夫の最後の言葉について「そこは誰にも想像できない位に広い場所、そして過去と現在と未来が同時に進行している」と。

### \*愛する人が今まさに旅立とうとしていたら

～勇気と思いやりの心をもって、最後の言葉を聞くためのアドバイスです!

- 愛する人の世界に入りましょう～心を開き・偏見を捨て「最後の言葉日記」に記録しましょう、いつかそこにちりばめられた珠玉の様な知恵に驚く筈です。
- 神聖なものに関心を持ちましょう～人智を超えた何らかの現象が起っていてあなたが聞いた言葉はその過程を表現しているかもしれません。

- 愛する人の言葉と経験を認めてあげましょう  
～間違っている・現実的でないと問わず認めて詳しく聞く。
- 相手の言葉に学ぶ～新しい国にいるのですから、その国ではこういう話し方をするのかと考えましょう。
- 真心を込め興味を持って質問しましょう  
～よく分らなければもっと聞かせて、と促す。
- 臨終の床で愛する人が反応せず何も言わなくてもどれだけ深く愛しているか伝えましょう、聴覚は最後まで機能しています。
- 沈黙を味わいましょう～テレパシーのようなコミュニケーション、祈りを捧げるように愛する人に語りかける。
- \* 悲しみを癒す～最後の言葉に耳を傾け、敬意を持って受け止めると愛する人は安らかに旅立てる。愛する人との絆を深め 1 つ一つの言葉を書き留める度に愛する人の意識の中に入れていける。

## 第2章 死に近づくと言葉が変化する～死の言葉を描写する方法

～亡くなる人にとって全く新しい未知の経験で二つ可能性を考えてみましょう

- ① 父がなくなる数日前に「これは興味深い」と云ったように「死」とは「これとしか表現のしようがない可能性」
- ② この世とは別の次元「死後の世界」が存在し現世で知られている意味が一切成り立たない、臨死体験者は自分のした経験を「言葉で言い表すことができない」と言います。

\* 臨死の状態から蘇生した患者はムーディに、こんなことを言いました（大学院で理解不能とナンセンスを中心に研究していた）

- 時間はあるのですが時間はありませんでした
- 死んでいるほうが生きている実感がありました
- 誰も何も言っていないのですが全員の言葉が全てわかりました
- 体から抜け出して銀河を旅しました
- ほんの1分程度の出来事のようにもあり千年の出来事のようにもありました  
～臨死体験を語る際の言葉のパターンを詳しく見ていくと、死に瀕した人々の言葉を理解するための土台が浮かび上がる。

\* ナンセンスな旅の話～臨死体験をした人は次の3つの描写か或いは全て含まれている **A.** 浮き上がり身体から離れた、何かが動いたりしているのを見たりまるで意識があるかのように感じた **B.** トンネル又は谷を通過した **C.** 既に他界している親戚・友人・スピリチュアルの存在と会い人生を振り返った。

\* 旅の案内役～死別した家族や友人に迎えられ案内して貰い或いは「光のような存在」に出会った。

\* 旅のクライマックスで人生を振り返る「映画を見ているようだ」 P 2

「人生の節目がよみかえってきた」等、実に様々

- \* 筆舌に尽くしがたい臨死体験～共通する見解は「三次元の世界しかないと感じて疑わなかった」が「先生たちは間違っていた別次元の世界がある」「あの世界は三次元の世界ではなかったから三次元の世界の言葉である体験を完全に伝えることは全く不可能です」
- \* しばしば矛盾に満ちた臨死体験者の言葉～ゲネス・リングとシャロン・クーパーの研究～目の不自由な臨死体験者 31 人の調査で其の内 80% が臨死体験の間は見る事ができたそうです。
- \* テレパシーのような死後の言語～「脳神経外科医が見た死後の世界」を著した（プルーフ・オブ・セブン）エベン・アレグザンダーは「あの世には一連の流れを成す時間」も「固定された空間」も「私たちが知っているような発語を介した言語」も存在しない様です、又「未来を予知することもできた」という人・臨死体験者の多くがその後もテレパシーで交流する能力を持ち続け直感が働くようになったと説明。

第 3 章 **人は死ぬ前に大きな出来事の告知をする**～「重大なことを現す比喩」と「完成を模索する特徴的な臨死の過程で発展する比喩」

#### 第 4 章 **大切な人に残す言葉**

- \* 新たな門出について語る旅の比喩～亡くなる人の話において旅の比喩は最も象徴的なテーマです。「黄色いバスが来たわ！あのバスよ！」誰が運転しているの？「分からないけど天使が沢山！」「船が待っている」「荷物は出来た？もうすぐ電車が来るわ」「コートを頂戴、出かけなければいけないの」
- \* 旅の比喩は万国共通～アフリカーンス語では「ヤギの放牧場に行く」オランダ語では「パイプから出る」ドイツ語では「永遠なる狩場に行く」ヘブライ語では「後の世界へと降りていく」ハンガリー語では「永遠なる狩場へと出発する」アイルランド語では「真実の道に行く」スペイン語では「旅に出る」と「より広い人生に移る」ポルトガル語では「上の階に行く」ルーマニア語では「角を曲がる」2014 年に発表された「いまわの際に人々が見る幻影と夢」について調べた研究によって長期間にわたってデータを集めたところ、被験者の 40% がどこかに行く夢、又は何処かへ行く準備をしていることが分かった。  
～死に瀕している人の夢には二つの大切なメッセージが込められている～
- ① 「物が崩れ落ちたり」「医者が首を振りながら去っていく」手の施しようがないという声が聞こえたりする
- ② 「新しい土地の兆し、大切な旧友と再会し肉体の命を超越した場所で悔いや癒しを見出す」
- \* **人生の旅**～臨死体験者の話は「**人生は旅でありその主な使命は愛を学ぶ事だ**」と教えられます。

テキサス州死刑囚監房の収容者 407 人の最後の言葉を調査した 2015 年の研究では最後の言葉には「ポジティブな感情を表す言葉の方がはるかに高い割合で含まれている」ことを発見

- \* 私達は旅立つのではなく到着する～到着先で既に他界している最愛の人と思いがけず再会「お母さん今行く・支度が整ったからね」「父さん僕はここだよ」「サラすぐ行くよ」私たちは新しい目的地に向かうのかもしれませんが、スティーブ・ジョブズを「オー・ウォー・オー・ウォー・オー・ウォー」としか表現できない場所・驚嘆させるほど素晴らしい世界へ向かうのかもしれませんが。

第 5 章 最後の日々に見られる力のこもった言葉～トーマス・エジソンが昏睡状態から目覚め・上を見ながら「あちらはなんて美しいんだ！」と驚きの声を上げた時に見ていた壮大な景色が目に入る位にスティーブ・ジョブズの視野も広がっていたのかもしれませんが。

#### 第 6 章 いまわの際の不可解な言葉を理解する

- \* この世とあの世の混合型～死刑囚を含め 200 人近くの人を看取ったキャリー・ラッシュ・ウィリスは「人生の終わりを迎える人々は片足を天国に、もう片方の足は地上について立っているようです」と。

#### 第 7 章 いまわの際の幻影とお迎え現象

- \* 亡くなった最愛の人々がやってくる～典型的な例として「父はまるで 10 年前に亡くなった母と電話で話しているようでした」又「父はとてもうきうきして楽しそうで何かすごくリアルなことが起こっているようでした」

ある 60 歳の女性は 10 年前に亡くなった夫を指し乍ら大きな声で娘に「あそこにお父さんがいるのが見えないの？ほらそこに！」又「お母さんが来たもう行かなきゃ」元ホスピス看護師から聞いた、ある患者さんの最後の様子は「彼らが見えますか？」と聞き「どんな人たちですか？」と聞くと「天使達が並んでいるもう行かないと」と言い、キッチンで泣いている妻に向かって「キャロル僕はもう行かなくてはならない、愛しているよ、又会おう」と呼びかけ又天井に向かって腕を上げ「神様！神様！」と言い乍ら後ろに倒れて亡くなった

- \* 2014 年にホスピス緩和ケアセンターが発表した研究では今わの際の夢や幻影を見るのは一般的な現象のようです、87%が夢や幻影を見たと回答、その内 72%が死別した最愛の人と再会し、幻影の 52%が何処かに旅立ちの準備をすることと関連、幻影は死の数ヶ月或いは数週間・数時間前に見られ通常の場合恐怖が軽減し生から死への移行を受け入れやすくなった。この知識は医療の世界でも一般的に受け入れられつつあります（WebMD という情報サイトに掲載）臨終の床で見る投薬の影響で見る幻覚とは質的に異なり殆どの場合に幻覚は不快で恐怖を与え投薬内容を変えるだけで簡単に見ない様にできます。
- \* 霊能者であり研究者であり作家でもある

イザベル・ショフトン・サアヴェンドラは科学者の家に生まれ物理学と数学を学び、科学教育と霊能者としての仕事の折り合いをつけ乍ら生きて、自然界の理解を通じて「例えば動物界に目を向ければ人間には知りようのない情報を得られる動物はゴマンという人間が処理できるのはこの世界に存在する情報のほんの一部です」と「蝶は紫外線を見ることでより健康な交尾相手を見分けられ、トナカイは紫外線を頼りに餌を見つけトナカイは天敵の動物の尿は紫外線を吸収するので天敵が通ったことがすぐ分かる、又多くの動物は地磁気を感じし反応しハムスターや山椒魚・スズメ・ニジマスから伊勢エビや細菌まで様々な生き物が地磁気を利用している、アリは 10~20 種類のフェロモンを使って社会を構築してまるで文章を作るようにこれ等のフェロモンを放出して意思疎通を図っている」

- 第 8 章 **言葉にならない最初の言葉と最後の言葉**～「はじめに言葉ありき」複雑な言語を話し操る能力こそが人間と他の生き物と決定的な違いです。言葉が人間を人間足らしめ人類が生き延びるために重要な社会的なつながりを生み出す道具を与えてくれたとも言えます。乳児と保護者の親の間では臨死体験に見られる「以心伝心による非言語的」コミュニケーションと同種のコミュニケーションも行われる（2012 年の論文エッセンス理論）愛し合う人たち特に親子間の中に存在するテレパシー的絆は死期が迫るととてもハッキリします
- \* 聖職者の娘ウイン・マラードは父親の最後の日々に彼女が目撃した感銘を「死と奇跡」という本に書いた。
  - \* 昏睡中でも理解している内なる言語～看護婦で研究者でもあるマデライン・ローレンスによると話し言葉は人生の終わりに衰えていきますが意識は衰えないそうです。昏睡状態から回復した 111 人の内 27%は意識がなかったはずの時間に周りの人の会話を聞き理解し感情レベルで反応した事を確認、23%は臨死体験や対外離脱を含む超感覚的知覚を経験、昏睡状態から回復した人の 70%以上が無意識の間に行った出来事を記憶していた。
  - \* 死の間際の覚醒～医療関係者の多くは「サンセットディ」と呼んで、研究者は「末期意識清明」と呼んで亡くなる数日前に起り短くて数分、長ければ 2 日位意識がはっきりして以前よりはつらつとエネルギーを取り戻す、それは最後の喜びと最後の和解です。私が「サンセットディ」について取材した人々の中には一人として正気が戻っている最中に怒りや悪意のこもった話をする人はいませんでした、好物の食べ物を欲しがったり、和解を求めたり、愛の言葉を伝えたりしたのです。
  - \* 言葉を介さない絆～「手を動かす」変化は顔全体に現われ時には上半身迄活力を取り戻す事があります。
  - \* 緩和ケア研究所の研究部長ペイが行った幅広い研究で

「夢や幻影の中ではごくわずかの言葉しか交わされていないのにも拘わらず、そこからとても大きな意味をくみ取り安らぎを得ているようです」

## 第9章 死後も続くコミュニケーション

- \* 向こうについたら連絡するよ～1988年に始めた死後のコミュニケーション・プロジェクトは故人と接触した事例を数千件集め、こう記しています「死者とコンタクトした事のある人は42～47%（未亡人で亡くなった夫とコンタクトは92%）子供を亡くした両親の実に75%が1年以内に遭遇しています、残念ながら、からかわれることを恐れ75%の人が誰にも話していません」
- \* 交渉して15年の寿命を得る～小学校教諭のベラ・マッケンジーは父の死の「予兆」について父は厳格で愛情表現もしないスピリチュアルなタイプでもなかった、ベラが7歳の頃に父が心臓発作を起こし6分間臨床死の状態、そのとき父は別人になって「あらゆる意味で愛情深くなり家族が父の中心となった」と、ベラが10代の頃に父が家族に臨死体験の事を語り賢明で愛情に満ちた存在とテレパシーで対話、きっと神に違いない、と感じた父はその声と交渉「養わなければならない子供が7人いるのでどうしても後、15年生きたいと懇願」すると一つだけ条件が示され「今後も愛情を持ってスピリチュアルに生きるなら願いを聞き入れる」と言われた父は条件をのみ、遂に15年経過した翌月に亡くなった。
- \* ドアベル・アラーム・電球で知らせる～誰かが無くなった時、又はその直後にドアベルやアラーム・電球等の電気の力を借りてメッセージを受け取る事例は数多い、父親が亡くなった時にメールで伝えられたメッセージで自然の中のシンクロニシティ～鳥や蝶が現れ普通よりズーと長くそこに留まる、お気に入り曲が流れる＝個人のゆかりの地を訪れた時に聞こえた事例を沢山の人が報告。

## 終章 聞くことが癒しになる

- \* 最後の一言～魂の再生の直接の証明に一番近い事例は会衆派教会の牧師から聞いたもので牧師は人が亡くなる最後の瞬間に「光を見た」というのを何度も聞いたという、最近22歳の男性の臨終の床で儀式を行っていて若者が衰弱し始めた時に藪から棒に「今回は22歳という約束だった」と云ったそうで今回は・という事は他の回もあったと考えています、つまり「他の人生を意味していたに違いありません」と、牧師にとって衝撃的な言葉でした。
- \* 過去数十年間に行われた綿密な調査によると人々は死別した知人と会うようです、その際の幻影や訪問者に深い心の安らぎをもたらすのです＝最愛の人が闇の中に永遠に消えてしまうと感じていた時に目を見張るほど意識がはっきりする事があり、これは亡くなる人の枕元にいる時、或いはあなた自身が今わの際にいる時に発見する・亡くなる人の言語の驚くべき特徴です。P 6

- \* 新たな超越的感覚～人生の終わりに見られる言語の変化はナンセンスではなく新たな感覚が発達するプロセスの一部かもしれません、この感覚はリングとクーパーの研究で被験者やその他の臨死体験者及び体外離脱者が報告している「超越的認識」です。
- \* **聞くことが癒しとなる**～私の願いは本書を読んだ皆さんが亡くなる人の言葉を耳にしたら、それは新しい領域に向かう最愛の人に招待されているのです！「**臨終の床にある人に付き添う時は心を開きましょう**」そして聞くことは癒しである事を思い出して下さい！よく耳を傾ければ愛する人が貴方に知恵や安心感を与えようとしている事に気付くでしょう。  
最後の言葉をゆとりの気持ちを持って受け入れられる事ができればそれだけ亡くなる人や彼等を愛する人々に大きな安らぎをもたらせるのです。

( 完 )